

The Sinfonietta

ザ・シンフォニエッタ

第34回演奏会

34th Concert



©三宅章憲

指揮 中井 章徳

2022年11月27日(日)

熊本県立劇場コンサートホール

開場13:45 開演14:30

ゲストコンサートミストレス 船津 真美子



撮影:ユーツークラシカルレコーディング

主催:ザ・シンフォニエッタ

後援:熊本県教育委員会 熊本市教育委員会 熊本日日新聞社 RKK TKU KKT KAB FM791 FMK

公式ホームページ <http://www.the-sinfonietta.org/>

〈新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、マスクの着用、その他感染対策にご協力をお願い致します。〉



指揮 中井 章徳 *Akitoku Nakai*

岡山県出身。くらしき作陽大学音楽学部指揮専攻を首席で卒業後、同大学大学院音楽研究科、桐朋オーケストラ・アカデミー、キジアーナ音楽院(伊)、京都市立芸術大学大学院博士(後期)課程作曲・指揮領域にて指揮を学ぶ。指揮を志賀保隆、大山平一郎、故岩城宏之、リヒャルト・シューマツヒャー、ダニエレ・アジマン、ジャンルイジ・ジェルメッティ、下野竜也、音楽学を丸山桂介、故森泰彦、池上健一郎の各氏に師事。1998年、ポーランドで開催された第21回マスタープレイヤーズ国際音楽コンクールで指揮部門最高位の名誉ディプロマ賞を受賞し、併せて全部門の中から最優秀者に贈られるマスタープレイヤーズ大賞を同時受賞。倉敷市芸術文化栄誉章(2000年)、第10回エネルギー音楽賞(2004年)、出雲市市民文化賞(2006年)、出雲市文化功労賞(2015年)を受賞。

©三宅章憲

これまでに札幌交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、群馬交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、京都フィルハーモニー室内合奏団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪交響楽団、Osaka Shion Wind Orchestra、岡山フィルハーモニック管弦楽団、広島交響楽団、九州交響楽団など各地の楽団で客演指揮を務めている。現在、出雲芸術アカデミー芸術監督、出雲フィルハーモニック音楽監督兼常任指揮者、北九州シティオペラ客演指揮者、イタリア学会会員。



ゲストコンサートミストレス 船津 真美子 *Mamiko Funatsu*

相愛大学音楽学部卒業、研究生修了。第6回日本クラシック音楽コンクール全国大会入選。グレゴール・ブーロ、里屋智佳子、小谷公子、木野雅之の各氏に師事。ベルリンにてレオン・シュピーラー氏にレッスンを受ける。大阪交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団ほか日本各地のオーケストラや、タイ・バンコク交響楽団にてオーケストラ客演奏者として演奏、現地で自身のリサイタルも開催。第4回熊本アートフェスティヴォ!聴衆賞受賞。平成音楽大学講師、必由館高校非常勤講師。日本演奏連盟、日本弦楽指導者協会会員。

管弦楽 ザ・シンフォニエッタ *The Sinfonietta*

1986年に結成された小編成のアマチュア・オーケストラ。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどの古典派の曲を中心にしながら、ロマン派、近代の曲なども演奏している。アンサンブルを楽しむため、小編成(50人以下)の特性を活かした選曲を行い、時間をかけた丁寧な音楽作りを目指している。これまでに共演した主な音楽家は、指揮者では本名徹二、山下一史、藤崎凡、久保田悠太香、松元宏康などの各氏、ソリストでは安永徹(Vn)、篠崎史紀(Vn)、O. ボルヴィツキー(Vc)、若林颯(Pf)、合志和子(Pf)、吉田秀晃(Pf)、青柳晋(Pf)、鈴木理恵子(Vn)、藤森亮一(Vc)、龍野しずく(Vc)、田尻大喜(Tp)、柴田恵奈(Vn)などの各氏で、すばらしい指導者・共演者に恵まれ充実した活動をしている。

2011年に若林颯氏の弾き振りでピアノ協奏曲3曲を一夜で演奏。また2012年には、山下一史氏指揮のもと、一般から募集した合唱団、県内外の歌手の方々と共演し歌劇「カルメン」の演奏会形式に挑戦して好評を得た。2017年には、ソリストに日本を代表するヴァイオリニストの鈴木理恵子氏とNHK交響楽団首席チェリスト藤森亮一氏を招き、ブラームスのドッペルコンチェルトを共演。第30回の節目にふさわしい演奏会となった。2018年からは指揮に松元宏康氏を招き、約200年前の演奏法など新しい試みに挑戦。聴衆含め一体感のあるステージとなり好評を得た。そして今回指揮に中井章徳氏を迎え、3年ぶりの演奏会に臨む。



撮影：ユーツークラシカルレコーディング

曲目解説に替えて ～指揮者 中井章徳氏を囲んでの座談会～

今回のプログラムについて、どのような意図でこういう構成をされたのでしょうか。

ベートーヴェンの8番をメインにしてへ長調に合う調性としてシューベルトなら1番がいいかな。ベートーヴェン晩年とシューベルト最初の作品で、時代的に同じ頃、というところが面白いんじゃないかと提案しました。

シューベルトの交響曲が一部を除いて演奏される機会が少ないのはなぜでしょうか。

初期作品の割にテクニク的に難しく、コンパクトな編成なので大編成のオーケストラではこの曲の味わいが出てこないのです。1812年頃の作品で、金管楽器にバルブやロータリーがついていない時代の音楽を現代の楽器で演奏するにはすごく音が高いのです。金管楽器などは音が出せないようなところを連続で吹かされる。それで除外されることが多い。すごくいい作品なんですけどね。ザ・シンフォニエッタの小さな編成だからできる音楽で魅力が再発見できたらいいな、という感じで提案してみました。

ベートーヴェンの交響曲第8番ってどんな曲ですか。

ベートーヴェンは、キリスト教的ではない神の創造力、人間を超えたものの存在による宇宙や人間の創造、そういう創造物と被創造物との関係をずっと問題にしていました。バッハの時代からオクターヴが全宇宙を表すという考えがあります。この8番も宇宙について哲学した作品で、オクターヴがたくさん出てきます。オクターヴは数字では1対2という関係になるのですが、オクト(8)、8番、2楽章で8分音符をメトロノームのテンポ88で演奏されるところなど、8という数字に徹底的にこだわった作品です。これ冗談音楽のように言われているのですが、そんな事はなく、厳格なる宇宙を表している音楽で非常にバッハ的です。1楽章が速い3拍子で始まるなんて交響曲としてはあり得ないことですが、バッハの組曲では当たり前のことで、3拍子の舞曲から始まります。バッハの時代はもっとゆっくりした舞曲ですけど。

ベートーヴェンはバッハの音楽を知っていたのでしょうか。

ベートーヴェンはバッハの作品を弾くピアニストでしたので作曲の根底にはバッハがあって、それをどうやって自分の作品として発表していくのかということに創作の工夫が見られます。8番は守破離でいうその離の領域ですね。破ってそこから離れて完全に彼の世界に。バロック時代の舞曲を昇華して、それが彼の宇宙や世界に対する考え方と結びついた作品であると思います。ベートーヴェンがもともとそういう考えを持っていたことは知られていましたが、20世紀、オーケストラの編成が大きくなる中でだんだんどっしりしたベートーヴェン像が求められてきます。19世紀後半から交響曲も重くなっていく。でもベートーヴェンの時代は、交響曲は軽い響きの作品で重さは持っていないのです。今回のアプローチはちょっとベートーヴェンの立ち位置に立って作品を見てみようという試みになります。

ロッシェニについて、いろいろな曲がある中でこの曲を推薦した理由を聞かせてください。

ベートーヴェン、シューベルトとのカップリングとして、その当時ヨーロッパで一番人気のあった作曲家というとロッシェニなんです。

悲劇的なオペラの幕間で演奏される喜劇をオペラ化して、喜劇で人々を楽しませたところにロッシェニの人気の秘訣があった。フィデリオなどベートーヴェンのオペラは逆で、哲学的・瞑想的で悲劇的なので一般市民から人気がない。ロッシェニはドリフターズみたいななんです。ボケ方転び方とか即興に見えるけど、全部台本に書いてある通りにやっていて、それがすごい。ロッシェニの音楽も同じで、書いてあることをいかに即興的に聞かせるか、書いてある通りにやると面白さが出るようになっている部分でいかに面白さを出すか。シューベルト16歳、ベートーヴェン42歳の作品と同じ時代のロッシェニ作品というとブルスキーノがでてくるんです。譜面台を叩くとか奇抜なアイデアや奏法・創意工夫がなされた作品で、誰が聞いても面白さがよくわかる作品です。

3曲とも同じ年代(1812年頃)の作曲というのは意識されたのでしょうか。

今はウクライナの問題があって戦争、混迷が起きてという中に、芸術とか文化ってどうあるべきなのか。1812年はナポレオン軍がロシアに攻めて敗北し、ヨーロッパの勢力図が大きく変わってものすごい社会不安ができた時期です。そういう中であって人々をいかに勇気づけて励ましていくかっていうのがロッシェニの中の命題としてあって、とにかく人々を劇場に来て楽しませるというところに徹しています。一方、ベートーヴェンはナポレオンに英雄像を持っていたけど、本当に大切なのは一人一人の人間に自立するというところで、音楽でそのことを哲学することが自分の使命と思って活動しました。そのため人々を楽しませようという要素はないのです。僕は、彼が8番で「宇宙や人間の知を超えたところってこういうものなんだ。」という調和を書いた、という風に捉えています。

同じ激動の時代の中で、何を社会・世界に発信していくのかっていうのは三者三様です。特にシューベルト

はまだ世の中に出てない時代です。1番を作曲した16歳の時は神学校の合唱団で神様を賛美する歌を歌いながら小さな音楽を作っていた。詩への関心があり、聖書に精通していて、読み方や解釈にすごく彼はこだわっていました。言葉で世の中の人々に訴えていくことがシューベルトの若い時代からすでに特性として見られる部分で、ピュアなものが込められています。

世俗的なオペラ作曲家ロッシーニ、教会音楽を書き続けて教会で育ったシューベルト、世界を捉えて宇宙を書いたベートーヴェン、同じ時代に向き合い方が全然違ったものが出て来るというのが面白いかな。

シューベルトはベートーヴェンやロッシーニの音楽を聴いていたのでしょうか。

シューベルトの先生がサリエリだったのでベートーヴェンやロッシーニの音楽を知っていたとは思いますが、すごく聴いているという環境ではなかったと思います。ベートーヴェン崇拜はもっと後です。ただ、ベートーヴェンが追及した宇宙の部分、シューベルトは詩で表現していて、その部分と共鳴してベートーヴェンの音楽に傾倒していたと思います。シューベルトは、言葉や転調の色合い、転調で変わっていく詩的な音楽語法が特性かなって思います。ベートーヴェンには見られないことです。

ロッシーニは作曲家をやめて料理の研究に没頭したと言われていますが、その理由は何なのでしょう。

ロッシーニって言われているほど世俗的ではないと思っています。大衆娯乐的ではなくて市民社会に対して作品を書き続けたのだけど、もともと職業音楽家やカストラートが演奏していたのを前提としていたのが、ナポレオンが禁止したことで劇場の形がガラッと変わるんですね。やろうとしたことが出来なくなって、自分の作品が書いたとおりに演奏されなくなっていく。「そういうことを僕は言いたかったんじゃない」という憤りみたいなことがあって劇場を離れたんだと思います。作品から見て本当にピュアに人々を喜ばせたかったんだらうなって思うんですけど。

先生のお好きな作曲家は誰ですか。

大学時代はベートーヴェンを、20代はドイツに留学してバロックダンスや舞曲を勉強してバッハの宗教曲もやっていたので、ベートーヴェンとバッハが原点です。30代でイタリアに留学先を変えて、ヴェルディ、ロッシーニなど、作曲家というよりはイタリアオペラをやるようになりました。イタリアはドイツ音楽を、ドイツもイタリアオペラを異国の音楽と見ていて、ヨーロッパって一つじゃないと感じました。イタリアオペラをもう少し勉強したいなっていうのがあって今ずっとイタリアに触れています。

先生はリハのときにフレーズを歌われる声がとても良いのですが声楽は専門にされていらっしゃるのでしょうか。

高校時代と、大学院のオペラ研究で声楽をやっていました。イタリアオペラをやると、オーケストラのリハーサルに歌手がいつもいるわけではないので自分が全部歌うとか、歌手の稽古でピアノを弾いて、譜が読めない人がいるので、歌ったり言葉のニュアンスを伝えたりするっていうのがあって、言葉を歌えないとイタリアオペラはできないのです。音楽の原点は歌なので。別にクラシックじゃなくても人の心に届くとか、人間がやるってことは、すごく愛があるもの、歌があるものが音楽になっていくので、その愛と歌がないものはAIに任せていいかなと感じます。できるだけハートフルのものができたらいいなと思いますね。

先生の目標や意気込みを聞かせてください。

作曲家と対話し続けるっていうのが一番重要なことかな。作品の伝道師として、社会でこれからどういう風にできるかなって。リモートでもできると叫ばれたりする時代ですが、音楽って生の空間で生の音楽・響きに触れてその倍音を感じる中でやらないと。作曲家が求めていたこと、大切にしてきたもの、芸術の本質みたいところはブラさずに活動が出来たらいいなって思っています。

(インタビューは以上です。本日はありがとうございました。)

※QRのアンケートにご回答頂きますと、掲載できなかった中井章徳氏へのインタビュー内容全文をご覧いただけます。

Program

ロッシーニ／歌劇「ブルスキーノ氏」序曲

シューベルト／交響曲第1番 ニ長調D82

第1楽章 Adagio - Allegro vivace

第2楽章 Andante

第3楽章 Menuetto. Allegro

第4楽章 Allegro vivace

～ 休 憩 ～

ベートーヴェン／交響曲第8番 ヘ長調作品93

第1楽章 Allegro vivace e con brio

第2楽章 Allegretto scherzando

第3楽章 Tempo di Menuetto

第4楽章 Allegro vivace

指揮：中井 章徳

ゲストコンサートミストレス：船津 真美子

ごあいさつ

本日はザ・シンフォニエッタ第34回演奏会にお越しいただきありがとうございます。

“Sinfonietta”とは「小さなオーケストラ」という意味です。1986年の創立以来、主に小編成の楽曲に取り組み、時間はかかっても良い演奏会となるようにじっくり練習することを心がけて参りました。これまで、すてきな楽曲、すばらしい音楽家、楽しいメンバーに恵まれて活動してきました。そして、演奏会にお越しいただくお客様と豊かな時間を共有できることを何よりの喜びと感じています。これまで当団にご支援いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

本日の演奏会では、ロッシーニ、シューベルト、ベートーヴェンの曲を演奏します。いずれも1812年頃、同時期の作曲で、ヨーロッパの歴史が大きな変革を迎えた頃のもので、3人の音楽家が同時期に作った曲から、当時の歴史の雰囲気を感じていただけるものと思います。

今回初共演となる指揮者の中井章徳（あきとく）氏は、岡山を拠点に活動され、数々のプロオケとの共演をはじめ、各地の市民オケ等とも交流があります。豊かな経験と見識、そして真摯な人柄で私たちを導いてくださいました。中井氏の指導のもと作り上げたすてきな音楽をお届けできるのはとても楽しみです。

コンサートミストレスの船津真美子氏には練習の時から細やかで丁寧なアドバイスでオーケストラの牽引役を担っていただきました。トレーナーの蓮沼昇氏、山本俊之氏には、練習開始当初の手探りの状態から、詳細な解説と心のこもった指導で演奏を形にさせていただきました。御三方とも当団にとって大変心強い存在です。改めて厚く御礼申し上げます。

今回の演奏会は3年ぶりとなります。演奏する3曲はいずれも明るく華やかな雰囲気のもので、1812年当時ロシア戦役などで不安な状態だったヨーロッパを明るく照らしたであろう3人の作曲家にならって、再開にふさわしく晴れやかに演奏したいと思います。

最後までお楽しみいただければ幸いです。

Members

ゲストコンサートミストリス

船津真美子※

1stヴァイオリン

岡田江身子

岡本侑子

小川雅之

高橋弘行

野原万友美

日夏美紀

山本繁市※

2ndヴァイオリン

岡部造史

月田理代

富奥史子

星乃三友紀

尾上香織※

河本直樹※

田中 唱※

ヴィオラ

和泉希代子

小坂ゆかり

毎床一寿

龍野珠美※

楡本由衣※

チェロ

齊藤正孝

坪井敬子

平塚ゆり

馬原ひろみ

井上 忍※

打越山修多※

コントラバス

岡田尚子

田中真紀※

湯原彩賀※

フルート

大林淳子

好村詩織

オーボエ

橘 徹

永島理恵

クラリネット

福島由貴

府高明子

岡村クミ

ファゴット

柴田義浩

蓮沼 昇※

ホルン

クープス 友美

トウメイジョセフ

トランペット

殿崎菜穂子※

府高大祐※

ティンパニ

釣谷智美

トレーナー

蓮沼 昇

山本俊之

※は賛助出演(敬称略)

お知らせとお願い

♪ 団員募集のお知らせ

ザ・シンフォニエッタでは、現在団員を募集しております。

ホームページ <http://www.the-sinfonietta.org/>

団員募集のページよりお問い合わせ下さい。

♪ 主催者からのお願い

1. ホール内での喫煙、飲食はかたく禁じられております。
2. 携帯電話等の電源、時計のアラームはお切りください。
3. 小学生未満の方のご入場はご遠慮ください。
また、お子様がお静かにできない場合は、「親子室」をご利用ください。
4. 演奏が始まりましたら、ホールの移動、座席の移動をお控えください。

♪ 次回演奏会のお知らせ

日にち：2023年9月2日(土)

場 所：熊本県立劇場コンサートホール

指 揮：松元 宏康

ソリスト：大村 友樹(フルート)

曲 目：ベートーヴェン「コリオラン」序曲

モーツァルト フルート協奏曲第1番

ベートーヴェン 交響曲第3番「英雄」

本日はご来場いただきありがとうございました。今後の演奏会の参考とさせていただきますので、右のQRを読み取り、アンケートにご回答いただきますようお願いいたします。

また、アンケートご回答後に、期間限定でパンフレットには掲載できなかった中井章徳氏へのインタビュー全文をご覧いただけます。

アンケート回答とインタビューの閲覧は「12月4日(日)」まで有効ですので、演奏会終了後にゆっくりご覧いただけます。

アンケートは
こちら↓

